

方言が聞き手に与える印象の変化 —京ことばと標準語の皮肉—

齋藤 あいか

(谷口 康祐ゼミ)

問 題

私たちの日常的なコミュニケーションでは、しばしば皮肉が用いられる。例えば、「君がこんなにいい点が取れるなんて、明日は雪が降るかもね」という発言には、相手の学業成績をそれとなく低く評価する意図が含まれている。このように、皮肉とは、「遠回しに意地わるく弱点などをつくこと（新村、1993）」である。

それではなぜ人はコミュニケーションに皮肉を用いるのだろうか。ひとつは先ほどの例文のように、相手を直接的に非難するのではなく遠回しに批判する手段として使われることが挙げられる。皮肉を用いる理由の一つとして、発言者が相手や第三者から意地悪な印象を持たれないようにすることが挙げられる。直接的な批判は、発言者自身が攻撃的で意地悪な人と見なされる可能性がある。一方で、皮肉を用いることで発言の攻撃性を和らげつつ、意図を効果的に伝えることが可能になるという利点がある。しかし、皮肉は単に相手を非難して攻撃するためだけではなく、政治的戦略としても機能している。桜井（1994）によると、

『史記』「滑稽列伝」には人より馬を愛するあまり愛馬の死に国葬をもって報いようとした王に、「それは本当に御立派を所行です。ついでに国政も馬にお任せになればいかがですか」という家臣の話が出てくる。…「立派な所行」という「字義どおり」の意味と、「馬に国政をさせるようなばかばかしい所行だ」という反字義的な意味（いうまでもなくこれが「家臣」の本意である）との二つの意味をよみとることができる

と示している。皮肉を用いることで、皮肉を受けた相手（被皮肉者）は皮肉を無視して自分の愚鈍

さを認めるか、皮肉の両義性を認めて自らの矛盾をさらけ出すかの二択を迫られ、ダブルバインドの状況に追い込まれることになる。すなわち、皮肉を無視して愚鈍さを認めるか、皮肉の両義性を受け入れて自らの矛盾をさらけ出すかのいずれかを選ばざるを得ない。このような状況を作り出すことで、被皮肉者に心理的な圧力を与え、政治的な交渉や権力闘争において発言者を優位に立たせることが可能になる。

このように、皮肉は遠回しに批判を伝える手段として使われるが、すべての人に通じるわけではないことが問題である。言葉をそのまま受け取る人もいるため、皮肉を言った側がその意図をうまく伝えられずに困ることもある。寿岳（1979）が挙げた例には、以下のような出来事が描かれている

おたがい旧制の大学院ののんきな頃の話である。正月にその人の家を友人のやんちゃ連が訪うた。にぎやかに遊んで夕方ともなった。そろそろお暇を、という頃おいである。みこしを上げた連中は、その母なる人に別れの挨拶をした。母君は満面に笑みをたたえ、愛想よく、「おやまあ、もうお帰りですか、すき焼などさし上げよう思うて、今、支度しておりますのに」というような挨拶をしたものである。その連中がそれが京都のお茶漬ならぬ京のすき焼であるということを知っていたのかどうか、とにかく彼らは、そのことばを文字通りに受け止めた。はきかけていた靴を再びぬいで、それじゃ、ご馳走になろうかとばかり、腰を落ちつけてしまったのであった。

このように、皮肉が通じないことで、母親は予定していなかったすき焼きを準備する羽目になり、言葉の裏の意図が伝わらなかったために思わぬ結果となったのだ。

さらに、皮肉の効果は話者の使用する方言によっても異なる可能性がある。京ことばは特に「いけず」として知られ、寿岳（1979）によると、

京都の人たちの「いけず」ということばには、いわく言いがたい雰囲気がついてまわっている。共通語の「いじわる」というよりもっと目立たず、しかももっと隠微な残酷さにみちている。…いけずというのは間接的でもろに衝突はしない。やんわりとしかも刺があるときに成立する行為である。いやらしくはあるが、きわめて洗練された行動である。知能犯と言ってもよい面を多分に含む

と示している。昔は都であった京都の人々は、政治的な動乱を乗り越えるために「いけず」を生活の技術として磨いてきた。これに対し、標準語はしばしば冷たく感じられることがあり、皮肉としての印象にも影響を与えられと考えられる。

本研究では、話者が使用する方言が聞き手の皮肉の感じ方にどのような影響を及ぼすのかを検討する。実験はスマートフォンを使用して会話を評定するものと、対面形式（1対1）で会話文の音声聞いて評定する2種類行う。標準語と京ことばを用いた皮肉の受け止め方の違いに注目し、その効果を実験的に明らかにすることを目的とする。

仮説

本研究では次の2つの仮説を立てて検討する。

仮説1

京ことばの方が標準語よりも皮肉と感じる。京ことばが標準語よりも皮肉と感じられる理由には、京都という地域に対する「いけず」や「皮肉を言う」という偏見が影響している。テレビ番組「ちんぷいぷい（2020）」では、「京都だから」という理由でお茶の誘いがあったとしても断るが無難だと指摘していた。

仮説2

会話文の内容が同じであっても、文章を読む場合と音声聞く場合では皮肉の感じ方に差が生じ

ると考える。特に、音声には声のトーンや話し方のニュアンスが含まれるため、文章のみの情報よりも皮肉として受け取られやすくなる可能性がある。

実験1

方法

実験参加者 京都先端科学大学の学生28名（男性18名、女性9名、無回答1名）が実験に参加し、参加者の平均年齢は18.917歳（ $SD=1.248$ ）であった。

刺激 2名（AとB）の会話を示した会話文を用いた（表1）。Aは常に標準語を話し、Bは条件に応じて標準語または京ことばを使った。会話は3から4回のやり取りで構成された。Bのセリフには、「標準語—皮肉」「標準語—皮肉っぽい」「標準語—皮肉っぽくない」「標準語—分からない」「京ことば—皮肉」「京ことば—皮肉っぽい」「京ことば—皮肉っぽくない」「京ことば—分からない」の8種類をそれぞれ2つずつ作成し、計16種類とした。なお、皮肉は相手を明確に批判する内容とした。皮肉っぽい、ほとんどの人がその内容を皮肉だと感じる内容とした。皮肉っぽくないは、あまり皮肉として感じない内容とした。分からないは、聞いた人によっては批判だと思われる内容とした。

手続き 実験はMicrosoft Formsを用いて実施され、授業中に参加者各自のスマートフォンから回答した。調査は自由参加とし、途中で回答を止められることを回答前に伝えた。

参加者は回答フォームにアクセスするQRコードをスマートフォンで読み取り、アクセスした。最初に年齢と性別を回答した後、16種類の会話文をAになったつもりで読み、最後のBのセリフがどのくらい皮肉らしく感じるかを1から7段階で評価した。評価項目は1を「皮肉に感じない」、7を「皮肉に感じる」とした。また、会話文はランダムな順序で提示した。16種類の会話文の評価をした後に、16種類の会話文のBのセリフではどのような方言が使われていたのかを回答した。この質問は16個の会話文を再確認せず、記憶に基づいて回答させた。

表1 実験で使用した会話文一覧

 皮肉

- 標準語 ① B:今日までに仕上げてほしいって言ってたレポートの進捗はどうですか？
A:まだ全然終わってません。
B:そうですか。丁寧にやってくれてるんですね。
- ② B:君がつくってくれた資料、漢字のミスが沢山ありましたよ。
A:すみません。訂正します。
B:こんなに沢山間違えられるのは、逆にすごいですね。
- 京ことば ① B:今日までに仕上げなあかんて言うてたレポートの進捗はどうですか？
A:まだ全然終わってません。
B:ああそうかあ。丁寧にやってくれたはるんですねえ。
- ② B: あんたがつくってくれはった資料、ぎょうさん漢字のミスがあったでえ。
A:すみません。訂正します。
B:こんなにぎょうさん間違えられるのんて、ほんますごいなあ。

皮肉っぽい

- 標準語 ① A:こんにちは。
B:こんにちは。今日の服、可愛いですね。
A:ありがとうございます。CHANELの新作ワンピースなんです。
B:よく似合ってますね。
- ② A: 部屋の掃除の手伝いに来てくださってありがとうございます。
B:いえいえ、こちらこそ頼ってくれてありがとうございます。
A:ここが私の部屋です。
B:わあ。こんなに掃除し甲斐のある部屋、初めてみました。
- 京ことば ① A:こんにちは。
B:こんにちは。今日の服、えらいにおうてはりますねえ。
A:ありがとうございます。CHANELの新作ワンピースなんです。
B:いや、ほんまよう似合うてはりますわあ。
- ② A: 部屋の掃除の手伝いに来てくださってありがとうございます。
B:なにいうてんの、水臭いことわんといて。
A:ここが私の部屋です。
B:まあ。こないに掃除し甲斐のある部屋、初めてみたわあ。
-

表1 続き

皮肉っぽくない

標準語

- ① A:(インターホン)こんにちは。
 B:こんにちは。どうされましたか?
 A:実家からたくさん野菜が送られてきたので、お裾分けに来ました。
 B:そうなんですね。わざわざありがとうございます。
- ② B:もしもし。
 A:もしもし。今、何をしていますか?
 B:試験勉強をしていました。
 A:忙しい時に電話してしまって、すみません。
 B:いえいえ、気にしないでください。

京ことば

- ① A:(インターホン)こんにちは。
 B:こんにちは。どうしはったん?
 A:実家からたくさん野菜が送られてきたので、お裾分けに来ました。
 B:そうですかぁ。わざわざおおきに、ありがとうございます。
- ② B:もしもし。
 A:もしもし。今、何をしていますか?
 B:試験勉強をやってます。
 A:忙しい時に電話してしまって、すみません。
 B:いやいや、かまへんかまへん。

分からない

標準語

- ① B:今日はありがとうございました。
 A:こちらこそありがとうございます。この後はどうしますか。
 B:こんな遅くまで付き合ってください、お時間は大丈夫ですか?
- ② A:おじゃまします。B:どうぞ。今日は息子さんと一緒なんですね。
 A:そうなんです。子供が騒がしくしてしまうかもしれませんが、すみません。
 B:いいんですよ。賑やかになっていいですね。

京ことば

- ① B:今日はおおきに、ありがとうございました。
 A:こちらこそありがとうございます。この後はどうしますか。
 B:えらい遅うまで付き合うてくれはって、時間は大丈夫?
- ② A:おじゃまします。
 B:どうぞどうぞ。今日は息子さんと一緒なんやねえ。
 A:そうなんです。子供が騒がしくしてしまうかもしれませんが、すみません。
 B:かまへんかまへん。賑やかになってよろしいわあ。

結果

皮肉得点は16種類の会話文を同じカテゴリに分類し、それぞれのカテゴリ内の得点を平均したものを皮肉得点として算出した。

会話文の皮肉度合いと方言、実験参加者の性別によって会話文の皮肉の感じ方に違いがあるかどうかを調べるため、皮肉度合い（皮肉、皮肉っぽい、皮肉っぽくない、分からない）×方言（標準語、京ことば）×性別の3要因の混合要因分散分析を行った。その結果、皮肉度合い [$F(3, 75) = 18.615$, $p < .001$] と方言 [$F(1, 25) = 10.201$, $p = .004$] は有意な主効果が見られた。しかし、性別の主効果 [$F(2, 25) = 0.342$, $p = .714$]、皮肉度合いと性別の交互作用 [$F(6, 75) = 1.538$, $p = .177$]、方言と性別の交互作用 [$F(2, 25) = 0.632$, $p = .540$]、皮肉度合いと方言の交互作用 [$F(3, 75) = 0.496$, $p = .686$]、皮肉度合いと方言と性別の交互作用 [$F(6, 75) = 0.908$, $p = .494$] は有意ではなかった。皮肉度合いのどの水準間で違いが示されたのか調べるため、Holm法を用いて事後検定を行った。その結果、皮肉と皮肉っぽい [$p < .001$]、皮肉と皮肉っぽくない [$p < .001$]、皮肉と分からない [$p = .006$]、皮肉っぽいと皮肉っぽくない [$p = .045$]、皮肉っぽくないと分からない [$p < .001$] の間に有意な差が示された。しかし、皮肉っぽいと分からない [$p = .069$] の間に有意な差は示されなかった。皮肉度合いと方言の記述統計量を図1に示した。

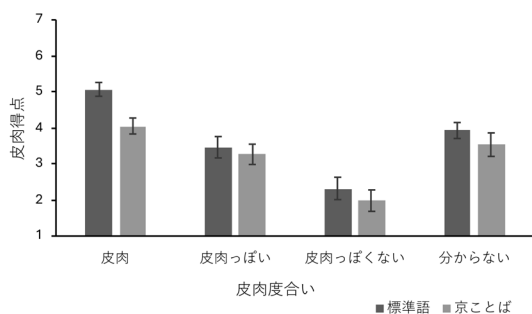


図1 実験1における皮肉度合いと方言の記述統計量
注) エラーバーは標準誤差を示す。

考察

本研究では、話し手の方言によって会話の皮肉の印象が変化するかを検討した。実験では、参加者が

各自のスマートフォンを使用して会話文を評定し、そのデータを分析した。その結果、皮肉度合いと方言の両方において有意な主効果が認められた。

方言については、京ことばより標準語の方が皮肉得点より高いことが示され、仮説1である「京ことばの方が標準語よりも皮肉と感じられる」は支持されなかった。一方で皮肉度合いについては、予想通りに「皮肉」が「皮肉っぽい」よりも皮肉得点が高く、「皮肉っぽい」が「皮肉っぽくない」よりも高いという結果が得られた。

実験2

方法

実験参加者 京都先端科学大学の学生27名（男性20名、女性7名）実験に参加した。参加者の平均年齢は22.074歳 ($SD = 2.615$) であった。

刺激 実験2では実験1と同じ会話文を音声で参加者に聞かせた。この実験では、標準語と京ことばの両方を話すことができるプロの女性ナレーターに依頼し、AとBの両役を録音した音声を使用した。Aの想定年齢は10代、Bの想定年齢は40代に設定し、これらの設定に基づいて録音を行った。

手続き 実験は、参加者と実験者で対面形式（1対1）により実施された。実験は自由参加とし、参加いつでも拒否できることを実験開始前に伝えた。

実験回答用紙に年齢と性別を記入した後、参加者は16個の会話文の音声を聞いた。会話文の順番は参加者ごとにランダムに変更され、音声はパソコンから再生された。皮肉の評価については実験1と同じとした。

結果

実験の手順を正しく理解していなかった参加者1名を分析から除外し、26名のデータを分析に用いた。皮肉得点は実験1と同様の方法で算出した。

会話文の皮肉度合いと方言、実験参加者の性別によって会話文の皮肉の感じ方に違いがあるかどうかを調べるため、皮肉度合い（皮肉、皮肉っぽい、皮肉っぽくない、分からない）×方言（標準語、京ことば）×性別の3要因混合計画要因の分散分析を

行った。その結果、皮肉度合い [$F(3, 72) = 80.784$, $p < .001$] と方言 [$F(1, 24) = 21.713$, $p < .001$] の主効果、皮肉度合いと方言の交互作用 [$F(3, 72) = 4.437$, $p = .006$] は有意であった。性別の主効果 [$F(1, 24) = 2.600$, $p = .120$]、皮肉度合いと性別の交互作用 [$F(3, 72) = 2.520$, $p = .065$]、方言と性別の交互作用 [$F(1, 24) = 0.029$, $p = .866$]、皮肉度合いと方言と性別の交互作用 [$F(3, 72) = 0.239$, $p = .869$] は有意ではなかった。皮肉度合いと方言の交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った。検討する要因が皮肉度合いの場合、標準語 [$F(3, 72) = 43.600$, $p < .001$] と京ことば [$F(3, 72) = 68.313$, $p < .001$] は有意な単純主効果が見られた。それぞれの単純主効果において、皮肉度合いのどの水準間で違いが示されたのかを調べるため、Holm 法を用いて事後検定を行った。その結果、標準語においては、すべての水準の組み合わせにおいて有意な差が示された [$p < .05$]。他方、京ことばにおいては、皮肉と皮肉っぽい [$p < .001$]、皮肉と皮肉っぽくない [$p < .001$]、皮肉と分からない [$p < .001$]、皮肉っぽいと皮肉っぽくない [$p < .001$]、皮肉っぽくないと分からない [$p < .001$] の間に有意な差があった。しかし、京ことばの皮肉っぽくないと分からない [$p < .309$] の間に有意な差はなかった。検討する要因が方言の場合、皮肉 [$F(1, 24) = 23.066$, $p < .001$]、皮肉っぽい [$F(1, 24) = 8.452$, $p = .008$]、皮肉っぽくない [$F(1, 24) = 6.640$, $p = .017$] は有意な単純主効果が見られた。分からない [$F(1, 24) = 1.009$, $p = .325$] の単純主効果は有意でなかった。皮肉度合いと方言の記述統計量を図 2 に示した。

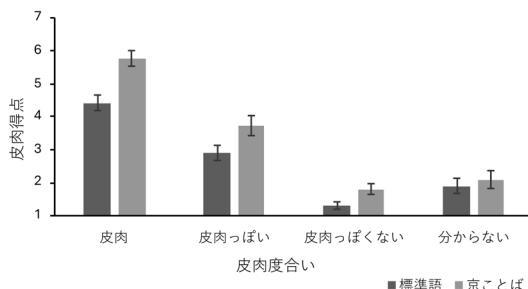


図 2 実験 2 における皮肉度合いと方言の記述統計量
注) エラーバーは標準誤差を示す。

考察

本研究では、話し手の方言によって受け手の皮肉の感じ方がどのように変化するかを検討した。実験は対面形式 (1 対 1) で実施され、参加者は音声を聞きながら実験解答用紙に記載された質問に回答した。その後、得られたデータを分析した結果、皮肉度合い、方言、そして皮肉度合いと方言の交互作用において有意な主効果が認められた。

方言に関する分析では、標準語よりも京ことばの方が皮肉得点が高いという結果が示された。しかし、「分からない」の会話文では、標準語と京ことばの間にそれほど差が無いと示された。よって、仮説 1「京ことばの方が標準語よりも皮肉と感じられる」は部分的に支持された。皮肉度合いに関しては、予想通り「皮肉」が「皮肉っぽい」よりも皮肉得点が高く、「皮肉っぽい」が「皮肉っぽくない」よりも高いという結果が得られた。

総合考察

本研究では、標準語と京ことばを用いた皮肉の受け止め方の違いに焦点を当て、話者が使用する方言が聞き手の皮肉の感じ方にどのような影響を与えるのかを検討した。実験はスマートフォンを使用して会話文を評定するものと、対面形式 (1 対 1) で会話文の音声を聞いて評定する 2 種類の実験を行った。その結果、実験 1 では京ことばよりも標準語の皮肉得点が高いことが示された。一方、実験 2 では、標準語よりも京ことばの皮肉得点が高かった。

この相反する結果が示された要因として、文章化による表現の違いがあると考えられる。標準語は語調が平板で直接的なため、文章で見ると冷たく感じられる可能性がある。一方、京ことばは語尾に「ねえ」などの柔らかな表現がつくことで、優しく穏やかな印象を与え、皮肉として受け取られにくいのではないかと推測される。渡辺・唐沢 (2013) は、「本研究の顕在的評価の結果では、大阪弁の話者は共通語よりも暖かさが高く評価されることが明らかになった」という。寿岳 (1979, p163) によれば、「京都がやさしそうに見えるのはそのことばのせいである。もちろんすでに触れたように、決してやさしくないかなり凄味のある

京都弁もあるにはあるが、全体としては、たしかに優雅でおっとりした様子がある。そのリズム、その言いまわし、その発声、すべてすべて、きめ細かで練り上げられた作品の観がある。その中でも、ひときわ京都的だとまず思わせられるのは、大きく言って、その敬語的言いまわしである」という。これらの研究から、方言そのものが持つ潜在的な印象が実験参加者に影響を与え、京ことばよりも標準語の皮肉得点が高くなったことが示唆される。

次に、仮説2である「会話文の内容が同じであっても、文章を読む場合と音声を聞く場合では皮肉の感じ方に差が生じると考える」について述べていく。まず、実験1の「標準語—皮肉」の平均値は $M=5.071$ であり、「標準語—皮肉っぽい」の平均値は $M=3.464$ であり、「標準語—皮肉っぽくない」の平均値は $M=2.321$ であり、「標準語—分からない」の平均値は $M=3.929$ であり、「京ことば—皮肉」の平均値は $M=4.054$ であり、「京ことば—皮肉っぽい」の平均値は $M=3.268$ であり、「京ことば—皮肉っぽくない」の平均値は $M=1.982$ であり、「京ことば—分からない」の平均値は $M=3.536$ であった。実験2の「標準語—皮肉」の平均値は $M=4.423$ であり、「標準語—皮肉っぽい」の平均値は $M=2.904$ であり、「標準語—皮肉っぽくない」の平均値は $M=1.308$ であり、「標準語—分からない」の平均値は $M=1.904$ であり、「京ことば—皮肉」の平均値は $M=5.769$ であり、「京ことば—皮肉っぽい」の平均値は $M=3.731$ であり、「京ことば—皮肉っぽくない」の平均値は $M=1.808$ であり、「京ことば—分からない」の平均値は $M=2.096$ であった。標準語は実験1である文章を読む場合の方が皮肉得点の平均値が高かった。京ことばは「皮肉」、「皮肉っぽい」は実験2である音声を聞く場合の方が皮肉得点の平均値が高かったが、「皮肉っぽくない」、「分からない」は実験1である文章を読む場合の方が皮肉得点の平均値が高かった。よって、標準語においては仮説2を支持しないが、京ことばの「皮肉」や「皮肉っぽい」では仮説2が支持される結果であった。さらに細かく見ていくと、「皮肉」では実験2の京ことばで特に皮肉得点が高くなっている。一方で、「分からない」では実験1のほ

うが皮肉得点が高い結果となっている。これらの違いは、会話文の提示方法や受け手の解釈の幅が異なることによって生じていると考えられる。音声を用いた場合、話者のイントネーションや抑揚、話す速度といった音声特有の要素が皮肉の評価に大きな影響を与える可能性がある。特に京ことばは、イントネーションや語尾の独特なニュアンスが皮肉を強調する役割を果たしていることが考えられる。このため、音声形式では京ことばの「皮肉」の皮肉得点が高くなったと考えられる。文章を用いた場合では、音声のような特徴的な手がかりがないため、聞き手は文脈や文字情報に基づいて皮肉を解釈する必要がある。これにより、文脈の曖昧さや解釈の幅が広がり、「分からない」の皮肉得点が高くなったと考えられる。

実験1では標準語の方が皮肉と感じられ、実験2では京ことばの方が皮肉と感じられたのには理由があると考えられる。標準語は京ことばに比べて語調が単調で、文字だけで見ると冷たい印象を与えることが要因の一つである。一方、京ことばには歴史的な背景が影響している。京都はかつて都であり、政治的な動乱を乗り越えるために「いけず」を生活の技術として発展させてきた。つまり、いつ敵になるかもわからない相手に自分の意見をはっきり言うことは危険であった。このような状況から、京ことばでは直接的な表現を避け、不快感を与えないような工夫が言語文化として形成された。この背景が京ことばのイメージに影響を与えており、京ことばを皮肉と感じる要因になっていると考えられる。

本研究では、標準語と京ことばの2種類の方言のみを対象に比較を行ったが、今後はその他の方言も対象に含めることで、地域差や方言的特徴が皮肉の印象に与える影響をより詳細に検討できると考えられる。また、参加者の出身地や日常的に使用している方言、性格といった個人差によって皮肉の受け取り方が異なる可能性があるため、これらの情報を事前に収集しておくなど考慮ができるだろう。

方言に関する研究は、コミュニケーションの理解を深める上で大いに役立つものである。特に、方言を用いた皮肉の研究を行うことで、同じ文章でも皮肉と感じる人とそうではない人の違いを調

べることができる。本実験においてもすべての文章をそのままの意味で捉えた人もいれば、敏感に反応して皮肉と受け取る人もいた。このような反応の違いを分析することで、個人差や文化的背景による影響を明らかにすることができる。さらに、本実験では文章の内容だけでなく、イントネーションも皮肉の感じ方に重要な役割を果たしていることが明らかになった。これを踏まえ、様々な方言のイントネーションがどのように受け取られるのかを探ることで、より多角的なコミュニケーションの理解につながる可能性がある。

謝 辞

本論文の執筆にあたり、多くの方々にご指導、ご支援を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

まず、指導教官である谷口先生には、研究の構想段階からデータ収集、論文執筆に至るまで、懇切丁寧なご指導と貴重な助言をいただきました。先生のご指導がなければ、本研究を完成させることはできませんでした。この場を借りて心より御礼申し上げます。

また、有限会社ティーステップの日笠智之氏には、実験に必要な音声の録音に際し、ナレーターの方をご手配いただくとともに、音声の編集にもお力添えをいただきました。ご多忙の中、惜しみないご支援を賜りましたことに心より御礼申し上げます。

さらに、株式会社キャラのにしむらまや氏には、実験で必要な音声の録音をしていただきました。貴重なお力添えを賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

引用文献

- MBS アナウンサー公式チャンネル「ウラオモテレビ」(2020). へえ〜のコトノハ・京都人の遠回しな会話に歴史あり Retrieved December 12,2024 from <https://youtu.be/e3EgQNCTpHc?si=uJwHZw9Z0tR4PAvR>
- 寿岳 章子 (1979). 暮らしの京ことば 朝日選書

- 桜井 芳生 (1994). コミュニケーションにおける「皮肉」のポリティックス 鹿大史学, 41, 1-12
- 新村 出 (編) (1993). 広辞苑 第四版 第三刷発行 株式会社岩波書店
- 渡辺 匠・唐沢 かおり (2013). 共通語と大阪方言に対する顕在的・潜在的態度の検討 心理学研究, 84, 1,20-27